

# 保險制度の發生發展而して其の消滅の過程

——物質的生產力の發展と保險制度——

小林 北 一 郎

## 一、開 序

保險制度の發生發展、而して其の消滅の過程を概論す。然しその方法は。

私が初めて保險制度に就いての纏つた話を聞いたのは、今日から十一年以前のことであつた。そしてそれは保險の商業學的研究と稱されてゐた體系であつた。果してそれは如何なるものであつたか。それは保險現象を權利と義務との觀點から系統づけたものであつた。斯々の場合は、保險者に損害填補の義務ありや否やと云ふのである。斯の如き方法が、何故に商業學的方法であるのか。法學的研究と獨立な如何なる根據が存在するのであるか。私は深く此の疑問に囚はれた。然し自分でも商業學的研究方法の本體は如何なるものか、到底理解

る事が出来なかつた。其後、數ヶ年に亙つて、種々の學者について、保險制度の講義に接したけれど、遂に右の疑問を解くことが出来なかつた。法律的保險研究に多くの興味を持ち得なかつた私は、保險制度に就いての研究を抛棄しやうとさへ考へた。

然し當時漸く私の物の考へ方の根底となりつゝあつた、唯物史觀、唯物辯證法は、私をしてそれ自らを保險制度研究への適用にかりたてて止まなかつた。それから私はそれが研究に着手して今日に至つた。その長き道程に於て、筆者の此の研究を甚だしく助けて呉れたのは、小島昌太郎氏の「保險と經濟」『保險本質論』『保險學要論』の諸著であつた。小島氏の右諸著は勿論、唯物史觀的方法に立脚されたものではない。私がさうした領域に於て利益したわけでは無く、此の經濟的研究の結果が、私を間接に導いて呉れたのである。私は日本の保險學者の中では、此の點に關して氏から程助けられた人は外に無いのである。私が今自分の貧しい研究を公にするに當つて、心から小島博士に敬意を表さなければならぬ責任を感じてゐるのである。然し同時に、現在の私は、博士とは全然、別個の方法に立脚して保險制度を理解してゐるものなる事も明かにして置かなければならない。

唯物史觀は、凡ゆる社會形態文化形態が、物質的生産力に規定さるる事を主張する。そこで私は、物質的生産力の發展が、如何に保險制度を發展せしめたかを論述する。私が本論に於て執つた方法は即ち是である。

社會が、其の成員の生活を保證する社會構成の下に於ては、更に保險制度なる相互扶助制度を要求する事は

ない。その理由は此の上もなく簡單なものではあるが、保險制度の發生發展而して其の消滅の過程を分析するに當つては、一瞬時と雖も忘却することを許されない肝要な理由である。此の理由を明確に把握せるものにして、初めて保險制度が何故、如何なる條件の下に存在しなければならなかつたかの理由をも、明確に把握する事が可能である。斯の如き根據から、私は原始共產社會に於て、保險制度が存在し得なかつた状態のデッサンを以て本論を出發せしめる。

## 二、原始共產社會と保險制度

共產社會とは如何なる社會を謂ふのであるか。生産手段共有の社會、それが即ち共產社會であると思ふ。原始共產社會と云ふも、生産手段共有の點に於ては何等相違する處が無い。原始と云ふは、モルガンの Savagery 及び Barbarism 二大時期を指稱したに外ならない。而して此の原始共產社會に於ける生産手段共有の事實は、當時の物質的生産力に依つて規定され、それに適應したものに外ならない。而して、生産手段共有制は、必然的に分配制度を規定する。「分配の方法は、各種族によつて異なるのであるが、何れの場合を取つても、十分に組織的計画的であつて、社會の成員全體についての配慮が行はれて」ゐる。斯の如き社會構成の下に於ては、個別的な社會成員が、孤立的に經濟窮乏に墜落するが如き場合を想像することは不可能である。今、假に斯の如き社會内に於て、何等かの不可抗的厄災に依つて、生産手段なり、生産物なりが滅失したとする。右の

場合發生した損失は、直接的に當該社會全體の損失として觀念される。或る特殊の個人の損失ではないのである。何故か？ 社會そのものが、各成員の生活に就いて責任を持つてゐると云ふことが、社會構成の基調だからである。とすれば斯の如き社會構成の下に、更に各成員の經濟的相互扶助制度の必要は、絶対に存在しないであらう。世には、偶然性の存在する處、そこに保險制度が存する様に考へてゐる人はないであらうか。共產社會に於ても「偶然」は存在する。何時、如何なる原因に依つて滅失するかは偶然であり得る。然し相互扶助制度——保險制度——は存在しないのである。偶然性の要素のみを以ては、保險制度の本質も、その存在理由も、説明する事が出来ないのである。問題は「偶然」の作用する具態的形態である。その具態的形態は、如何にして決定されるのであるか。それは社會組織によつてである。そしてその社會組織を規定するのは終局に於ては物質的生産力に外ならない。原始共產社會は、一定の高さに於ける、物質的生産力に必然的に規定され、適應した社會形態であつた。而して斯の如き社會構成は、それ自體が完全なる相互扶助制であつたが爲め、保險制度を更に要求することはなかつたのである。物質的生産力の一定の高さは、斯くして保險制度に存在の餘地を與へなかつたのである。

### 三、保險制度の發生

生産力のより以上の發展は、原始共產社會の狹隘なる生産關係、従つてその社會組織と相容れなくなつた。

共產制社會は、生産力の一定發展段階に於ては、それが發展の桎梏に轉化するのである。斯くして原始共產制社會は、必然的に崩壊しなければならなかつた。生産手段私有制の社會が、原始共產制社會崩壊の中から生れ出て來た。斯くして社會構成は、根本的にその様相を變化して來る。生産手段の私有主體は、自己の經濟生活を持つ。彼等は自己の經濟生活に就いては、自己が責任を持たなければならぬ。斯くして「偶然性」の作用が、個別的に峻烈な結果を齎すに至るのである。それは如何なる意味で、そして如何なる譯であるか。

それは斯ふだ。偶然的厄災に依る物質的損害は、社會の損害損失であるより、各生産手段私有者等の損害損失である。是等損失は、社會成員の共同負擔になるのではなく、各私有者各自に於ける、單獨負擔となる外仕方のない損失なのである。是は生産手段が私有されてゐる社會構成に於ては、全く必然的である。生産手段共有の社會關係の下に於ては、各人は各人に依つて支持されてゐるが、此の形態の下に於ては、各人は各人自らに依つて支持される外はない。斯の如き客觀的條件は、保險制度發生の發端を必然的に生成せしめる。小島博士は、此の間の事情を次の如く説明せられてゐる。「人類の物質的資料の獲得使用が交換原則の下に統制せらるる様になつてからは「偶然」に發生する事件の結果として物質的資料の獲得使用が害せられ、又は是を獲得する必要が生じてそれが爲め、生活の安定が破らるる事も屢々生ずることとなつたから、此の物的生活に影響を及ぼすところの「偶然」に對抗する方法を必要とするに至り、其の目的の爲めに生じたものが昔にあつては保險類似の原始的制度であり、今日にあつては即ち保險である。」と。

博士が此處で、「人類の物質的資料の獲得使用が交換原則の下に統制せらるる様になつてから」と云はれてゐるのは、私の所謂原始共產社會崩壞後の社會構成を總括的に指示されたものと私は解釋する。もともと、交換原則が作用するに至つたのは何故かと云へば、社會の物的生産力が進展して來て、生産手段共有制を廢棄したからに外ならない。交換の發生は、物的生産力發展の一指標である。

物質的生産力の發展は、生産手段共有制を終末せしめ、私有制の社會を發生せしめた。と必然的にそこから保險制度が發端して來た。私は斯ふ説明した。私は此處で更に若干の追論を必要と考へる。

世界經濟史の事實に依れば、原始共產制崩壞の跡から生成し來つた社會は、奴隸制の社會、そして其の次が封建制の社會と云ふ劃一的順序には進まなかつた。然しそれは何れでもいいとして、私が此處で云ひ度いことは、奴隸制と云ひ、封建制と云ひ、是等兩種の社會構成に於ては、保險制度は、如何にも其の發端を見出すではあつたが、その發生が、發展的飛躍にまで至るべき客觀的條件を未だ與へられてはゐなかつたと云ふことである。人類社會の古代、中世は、自然經濟、農業經濟の時代であつた。商業、工業は、僅かにその片隅に存在してゐたに過ぎなかつた。今日、保險制度類似の原始的制度として擧げられてゐる冒險貸借とかギルド組織とか云ふのは、斯の如き時代の商業、工業の產物であつた。社會全體が所謂「交換原則」の支配を受けてゐたのではなくて、社會機構のアチラの隅、コチラの隅が此の原則の統制を受けてゐたのである。人類が未だ機械を知らず、従つて大規模生産の方法を持つてゐなかつた時代には、全く必然的な結果であつた。

然らば、斯の如き客觀的狀態は、何故に保險制度の飛躍的發展を不可能ならしめたのであるか。

個別的經濟の生活を共に確保する爲めには、各個別經濟の、均等分擔分の集積が存在しなければならぬ。今日に就いて云へば、貨幣の形態を以てなされる保險料が即ち之に該當する。處で、社會の生産、分配を統制する意識的統一的機關の存在しない社會に於ては、保險制度に於ける共通分擔分の集積即ち共同準備は、貨幣の形態を以て爲されなければ、その機能を充分に發揮する事が出来ない。而して其の貨幣が前述の社會に於ては、全經濟生活を支配する迄に至つてゐない。それは、物質的生産力の發達程度低き必然の結果として、交換經濟が支配的になつてゐないからである。

是が一つの理由である。此の事から更に第二の理由が生れる。それは交通の發達してゐない事である。斯の如き客觀的條件を前提として、我等は廣範な領域に互る個別經濟の生活確保を、共に成就する可能を信ずる事が出来るであらうか。全くその反對である。斯くして當時の保險制度は、長くその發端的形態を脱却するを得ず、極めて狭き地域に於ける限られたる少數の者を總括する組織たる外なかつた譯である。

#### 四、保險制度の肯定的發展

保險制度を發端せしめた理由は、必然的により以上の飛躍的發展を妨げた。その理由とは、外ならない、物質的生産力の一定の發展段階であつた。保險制度が飛躍する爲めには、發展する爲めには、物質的生産力の飛

躍的發展そのものが先づ與へられなければならない。そしてそれは、中世の終り頃から最も活發に與へられたのであつた。蒸氣機關が發明せられ、紡績機械が使用される様になつて來たのだ。ワット、アトライト、カトライトの名は、保險制度の發展史を書く者にも決して忘れてはならないものだ、私は信じてゐる。

世には、保險制度が、合理的基礎を持ち、飛躍的發展を爲すに至つたのは、一つの數學的發見即ち、大數法則の發見に基くものだと考へてゐる人がないであらうか。唯單に、大數法則が發見され、平均觀察の方法が實證されたからと云つて、其のことから直ちに、保險制度が突如として合理的になつたり、飛躍的に發展したりするものではない。交換經濟が支配的になり、貨幣經濟が一般化し、通信交通の發達が與へられてゐないなら、保險制度の合理化も、擴大も、發展も考へられるものではない。大數法則は、それが適用可能の状態の下に於て、發見されなければならない。だから私は、非合理的保險制度の合理的保險制度への飛躍の根本原因を、數學的發見には歸せしめないで、そう云ふ發見を、保險制度の基準として適用する事を可能ならしめた、貨幣經濟の經濟生活への一般的擴充に求むるのである。

然らば、その貨幣經濟の擴充は、何によつて齎されたのであるか。勿論、それは物質的生産力に依つてである。物質的生産力、貨幣經濟の一般的成立、交通の發達、是等は皆一つの鐵則に貫かれてゐる、必然的連繋に外ならない。此の鐵則は既に見たる如く、保險制度をさへも貫いてゐる。貨幣經濟の發達は、各個別經濟の共同的均等支出の合理的手段を齎した。貨幣は正確に均等配分され、且つ保存に堪へる共同準備の構成要素とし

て、最も妥當なものである。

中世紀の末葉、從來の非合理的保險制度が、合理的保險制度に飛躍したのは、斯くして當時、恰かも爲された大數法則の發見に歸因したと云ふよりも、むしろ、産業革命を齎した物質的生産力の驚くべき發達によつたものであつた。

産業革命の動力となつた機械は、益々洗鍊されて行つた。生産力は驚くべき速度で向上して行く。讀者は、アダム・スミスがピピツドに説明したあの留針の例を記憶されてゐるであらう。大規模生産は、國內市場より國際市場の開拓を結果し、貨幣經濟は愈々深く社會の機構に喰ひ込んで行つた。必然的に交通は發展した。保險制度發展の條件は、完全に備へられた。そして保險制度は、どしどし擴大され、整備され、大規模となり、國際的性質をさへも獲得して行つた。「資本家的生産方法の支配する社會の富は莫大なる商品集積として現はれる。」此の「莫大なる商品の集積」は、擧げて財産保險の對象なのである。是等商品は、洪水の如き流通の波を畫く。そして生活は愈益々貨幣價値を以て統一されるのである。

資本家的生産方法は、誠に多くのことを意味する。それは、商品生産の方法である。従つてそれは營利生産であり、自由競争の生産である。貨幣經濟は、此の商品生産の必然的結果である。だから既に私が述べたところの、貨幣經濟が一般的でないところに、保險制度の飛躍的發展があり得ないと云ふ事は、又、商品生産が支配的でないところに、保險制度の飛躍的發展はあり得ないと云ひ換へ得る譯なのである。處で、この商品生産

は、既に述べた様に自由競争の生産なのである。個人主義的生産でもある。偶然なる事故によつて、工場を失つた場合、商品を失つた場合、それらの損失は自己の責任であるは勿論、競争者との關係に於て全く致命的でさへある。だから保險制度は又、個人主義的生産の自衛手段であるとも觀念する事が出来る。保險制度は社會的なものであると云ふ事は、今日まで誠に多く繰返されて來た事であつた。處がその社會的制度が個人主義の擁護者であつたのだ。奴隸制社會も、封建制社會も個人主義的社會ではなかつた。個人主義社會が成立する爲めには、資本家的生産方法が與へられなければならなかつたのだ。否、此の生産方法が支配的である處の社會が生れなければならなかつた。それは、産業革命がなければ不可能である事を充分知つてゐる。とすれば、飛躍的發展過程にある所謂現代的合理的保險制度と、個人主義思想とは、全くの双生兒であつたのだと、云へるのではなからうか。個人的なものと、そして社會的なものが双生兒であるとは確かに一つの皮肉であるに違ひない。然し此の皮肉の完き理解こそは、今日の保險制度理解の鍵である。保險學者の所謂現代的保險制度は資本主義社會に於て、初めて可能となつた。その資本主義こそは、又個人主義の生母でもあつた。だから保險制度が社會的制度であるといふ事は、結局は、個人主義制度の發展を助長する制度であると云ふ事に外ならない。保險制度の存在を考へないで、資本主義的諸企業の圓滑な發展を望み得ない事は一つの常識である。

## 五、保險制度の否定的發展

産業革命に依つて齎らされた資本主義社會は、其後も物質的生産力の發展を止むることはなかつた。然しそれは無限に續くことが出来なかつた。かつては生産力發展の條件であつた資本主義は、一定の段階に至つて、徐々に生産力發展の桎梏に轉化せざるを得なくなつた。それも亦、物質的生産力發展の齎らせる皮肉なる必然的結果ではあつたのだ。資本主義的大規模生産は、必然的に小企業者をプロレタリア群の中へ突き落して了つた。社會の生産の發展は従つて資本主義社會の發展は益々プロレタリアの數を増大せしめた。此の階級に屬する人々は、自己の勞働力を賣るより外に生活し得ないのである。處がプロレタリアは、死傷、老衰による勞働能力の喪失、失職による勞働機會の消失の二つの大きな致命的危險に襲はれてゐる。前者は勞働能力そのものを失ふ場合であり、後者は勞働力を賣り得ない場合である。何れにしても、彼等にとつては、生活資料の杜絶である。斯の如き場合の一端に應ずる爲めに、生命保險制度が存在し得た。然しその制度の機能を享受する爲めには、所定の反對給付が必要なのである。然るに資本主義社會を支配する鐵則——價值法則は、プロレタリア階級に、右反對給付の可能を與へては呉れなかつた。

社會的客觀的條件が、こゝまで發展し來れるとき、保險制度は必然的に一つの飛躍をなすべく餘儀なくされた。それはプロレタリア階級の保險制度への意識的包括の必要即ち之である。もともとプロレタリア階級は、社會的生産力構成の缺くべからざる主力的要因の一つである。故に生産階級たるプロレタリア階級の疲弊、反感は、結局資本家社會發展の道でないことを、資本家自らも悟つて來たのである。然し斯の如き客觀的條件の

下に於てなさるべき保険制度の飛躍は、資本主義社會成立の當初に爲された保険制度の飛躍とは、必然的にその本質を異にするべきものであつた。他の方法で爲されなければならなかつた。即ち社會保険の方法によつて爲されたのである。社會保険の方法とはどんなものか。それは保険制度への加入者である労働者が、反對給付の一部分のみを負擔するに止め、若くは何等負擔せずして、殘額若くは全額を資本家若くは國家に於て負擔する方法である。從來の有償的保険制度に對して、確かに一つの大きな飛躍であると考へなければならぬ。だから學者によつては、無償的な社會保険制度は、保険制度の本質を持つてゐないから、保険で無いなどと論斷する者が現れたのである。

保険制度は斯くして二度の飛躍をその歴史的発展の中に持つた。一つは、貨幣經濟の一般化による合理的現代的保険制度への飛躍であり、他は有償的保険制度より社會保険制度への飛躍が之である。前者の飛躍は資本主義生成の進軍ラツパの下に、後者は資本主義爛熟期から下り坂にかけての、フューネラル、ミユウヂツクの下に行はれたのである。そしてそれは、何れも物質的生産力發展の必然的結果であつた。

共産的生産方法から古代的生産方法への發展、古代的生産方法から中世封建的生産方法への推移、そして資本家的生産方法の發生發展から、やがて没落期への轉落と、生成變化し來れる生産方法は、何れも皆、當時の物的生産力の一定の發展段階に適應したものであつた。而して、保険制度は又其の生産方法の變化につれて、生成、發展、飛躍して來た事は、既に述べた處から明瞭であらうと思ふ。

私は本節を、保險制度の否定的發展と題してあつた。それは如何なる意味であるか。是に對する答は、既に述べた中に含まれてはゐる。然し私は、更に之を明白な形で取扱ひ度く思ふ。

資本家的生産方法は、生産手段より遊離されたる、プロレタリア階級の存在を前提とする。是れなくば資本家的生産方法も亦、存在し得ない。だからプロレタリア階級の存在自體が、直ちに資本主義社會の行き詰りを意味しはしない。それは唯に資本主義の存在條件であつたのみでなく、又その發展の條件であつたのだ。然し其の資本主義の發展が一定段階に達するや、それは（プロレタリア階級）資本主義の意識的變革者に轉化し來るのである。故にプロレタリア階級の發展は、資本主義の自己矛盾の現象形態であると云ふことは、右の如き歴史的事實の發展を理解してゐる限りは何等差支へない譯である。處で社會保險制度は、此のプロレタリア階級の發展に促されて、之を對象として發生發展して來たものである。その意味に於て、社會保險制度は資本主義の自己矛盾の、保險制度への反映であると私は見るのである。それを私は保險制度の否定的發展と云ふ。何故か。こゝで私は、本論の初めの部分に於て試みた原始共產制社會と保險制度との關係を想起さるゝことを望まなければならぬ。保險制度存在の、發生の抑々の條件は如何なるものであつたらうか。資本主義の自己否定は如何なる社會への轉化であるのであらうか。此の事に就ては、私は更に節を改めて考察してみやうと思ふ。

## 六、保險制度の消滅（保險の社會化）

生産手段共有の社會構成に於て、私有制度の下に存在する保險制度の存在を想定することは出来ない。共有制社會の下に於ては、保險制度の機能は、社會そのものの意識的機關の職能へと解消して了ふ譯である。私には、保險制度の社會化と云ふことを此の意味に解してゐるのである。故に私にとつては、保險の社會化は即ち保險の消滅である。然らば、左様な社會化は一體可能なのであるか。

それは、生産手段共有の社會が實現されなければ、全く不可能であらう。その理由は既に明瞭である。（本論初めの部分参照）故に保險制度の社會化が可能か、不可能かの問題に對する科學的回答は、實は歴史哲學に立脚してなされなければならないものである。保險制度自體の分析からは、科學的解決は求められない。此の問題は結局、資本主義社會は必然的に共產主義社會へ轉化するか否かの問題の解決に依つて解決される外なきものである。果して然らば、資本主義社會は必然的に、終焉するものであるか如何。私は此の問題に就いて、多く此處で云ふ譯にはゆかない。それは餘りに此の小論の範圍外であるかに考へられる。然し、私の理解してゐる歴史觀に立脚して簡単に結論を云へば、社會組織は終局に於ては、生産力と生産關係との辯證法的關係に於て變化してゆくものである。資本主義的社會組織は、發展せる物的生産力——社會的に組織された機械的大規模生産組織——と生産關係——生産手段の非社會的所有關係——との間に存在する矛盾によつて、必然的に終

焉するものである。そして其の後に來る社會は、發展せる生産力に適應せる生産手段共有制の社會であるであらう。斯の如き變革あるに非ざれば、今日の社會に於ける根本的矛盾は除去さるることはない。

右の如き必然性を認識せざるを得ない私は、當然、保險制度社會化の可能性を主張せざるを得ないのである。そしてそれは單なる主觀的希望よりなされてゐるのではないのである。

## 七、結 尾

私が本誌の既刊號（第六卷上冊）に於て *underwriting* のことを論じた節、最後の個所で、非社會的なリスク撰擇と云ひ、保有額最高限と云ふことは、何故存在するのかと云へば、それは保險制度が個別對立的になつてゐるからだ。然し、それが個別對立的になつてゐるのは何故か、それは如何にして消滅するかを、科學的に答へなければ、私の小論は一つのマボロシであるかも知れない。然しそれはさうでない。そのことは何れ稿を改めて述べると云つて置いたのであつたが、今度の小論は、此の約を果したものだとも考へられるのである。個別對立的な状態は、生産手段の私有制社會に於ける保險制度が必然的に採る形式だつたことは、更に説明を加へるまでもない。そしてそれは、保險制度の社會化に依つて、完全に終末さるべきことも明瞭であらう。

保險制度は、物質的生産力發展の一定の段階に於て發生し、生産力發展の運行に適應して發展し、遂に社會化の過程を辿る。之が本論の結論である。（一九三一—八一十）